

# 茂原市史編さん事業の活動

(民俗調査その二)

「戦後八十年 一つの今昔物語」

今年は、昭和百年という節目の年に当たります。そして8月15日は、終戦から80年の月日が流れたことになります。今回は、一枚の航空写真から始まる茂原市の戦後史の一部を追いかけてみたいと思います。

左の航空写真は、本市のある地域を写したものです。かつて防衛庁（現防衛省）に勤務していた長内氏（市内北塚）から提供していただいたものです。この写真は①いくつかの②どこを③だれが撮ったもののなかでしょうか。



阿久川

阿久川をはさんで、左（西）が基地本部エリア、右（東）が飛行場エリア。赤丸印の地区が、現在の萩原小学校で、上官の兵舎が置かれていた。この兵舎を利用して東京農大茂原分校が誕生した。

答え合わせをしてみましょう。①昭和20年8月13日 ②市内の東郷地区 ③撮影者は米軍です。つまり終戦の二日前、当時の海軍茂原飛行場の航空写真です。画像が小さくて見づらいますが、Dummy（模造の戦闘機）、Hangar（模造の戦闘機）、Revetment（掩体壕）などが英語で記されています。本土決戦もやむなしと考える日本軍に対し、すでに正確な情報を米軍が持っていたことがわかります。さて、この飛行場跡地はどう変わっていったのでしょうか。

のでしょうか。

終戦後GHQによって武装解除された後、この飛行場跡地は大蔵財産（国有地）となりましたが、現在は学校や工場、住宅地へと姿を変えています。その一つに昭和40年開校の萩原小があります。では、萩原小ができる前には何があったのでしょうか。それは東京農業大学千葉分校（茂原分校）です。なんと茂原市にも大学があったのです。

広大で平坦な跡地は、区画整理され、水道や兵舎も残っていたためたいへん魅力的でした。農大の他に茂原農学校（現茂原樟陽高）や県農業会指導農場などがその取得に手を挙げました。なかでも農大と最後まで競ったのが明治大学でした。この誘致には茂原市出身の国会議員が深く関わります。明大は鶴澤總明、農大は千葉三郎です。二人とも大学の学長や総長を務め、パイプ役としては適任でした。その結果は、明大が菅田（千葉市）に農場を取得し、この競合から降りることになります。こうして昭和22年に、晴れて茂原の地に新制大学が誕生しました。

ました。

茂原分校には、林学科と畜産学科の二学科があり、全国から学生が入学してきました。交通と食糧事情の厳しい当時を想像すると、茂原市内に下宿する学生も多かったようです。本町に星野薬舗という薬店があり、下宿先の一つでした。店主の星野さんは、当時の学生さんと現在も交流があり、そのご縁で貴重な史料をお借りすることができました。昭和29年林学科入学の二人の手記を抜粋します。

「房総東線で茂原駅に降り立つ。希望に燃え東京農業大学千葉農学部（現茂原農学校）の門は風格があるが、学内に入ってみると兵舎の跡、大学とは名ばかりであった」（宮崎県出身）



東京農業大学茂原分校の校舎  
（出典：「目で見る東京農大百年」）

「収穫祭こそ、最高の思い出。前日は仮装行列で町内を5時間も練り歩く。住民は農大グランドに大勢集まり、拍手喝采。茂原の人達とは本当に仲良くさせてもらった」（秋田県出身）

茂原が思い出の地として、当時の学生たちの心に刻まれていたことが伝わってきます。このように順調だった茂原分校ですが、大学本部との格差が広がる中、ついに昭和34年に東京に移転することになります。わずか十年足らずの短命でした。歴史に「もしも」はタブーですが、もしも茂原にこのまま農大が残っていたら・・・と考えると、残念で仕方ありません。

しかしながら、戦争の遺構を未来ある若者の学びの場として提供できたこと、その後も本市の文教地区として発展していったことは、茂原市民にとっても誇れるべき歴史の「コマ」と言えるのではないのでしょうか。茂原市史編さん委員会 調査協力員 古山 茂和

問合せ

美術館・郷土資料館

TEL 26 2131 FAX 26 2132